

シュムペーター体系と ポスト・ケインジアン体系

～総合のための序説～

亀 畑 義 彦 著

泉 文 堂 版

著者紹介

かめ はた よし ひこ
亀 畑 義 彦

1936年 東京都世田谷区・奥沢に生まれる
1962年 北海学園大学経済学部卒業
1969年 北海道大学大学院経済学研究科、博士
課程修了
現 在 北海道教育大学助教授
専 攻 理論経済学
著 書 「現代経済変動理論」新評論1974年
現 住 所 北海道旭川市神楽2条5丁目

シュムペーター体系とポストケインジアン体系

昭和51年6月30日第1刷発行

定価 2000 円

著 者 © 亀 畑 義 彦

発 行 者 大 坪 嘉 春

印 刷 所 松沢印刷株式会社

東京都猿樂町2-5-3

発 行 所 株式会社 泉 文 堂

東京都新宿区下善台1-2-16

電話東京 (951) 9610番

振替東京 5-13804 番

郵便番号 161

3033-176025-3908

は じ め に

私の北海道大学大学院在学中は、新古典派成長理論が隆盛をきわめていた。この理論のもつ精華さに魅力を感じ、かつ、単純な経済現象を考える上でも高度な学問研究が基礎になければならないことを認知していながらも、この理論の持つ説得力に欠けた根拠と現実世界との不調和には、大きな疑問を感じざるを得なかった。その疑問に答えるための途の1つは、実証的な経済変動理論の完成にあり、そのためには、まず最初に、ポスト・ケインジアン体系を再考察する必要があった。

その頃の私の興味の中心は、シュムペーターの「壮大な動学」にあり、ポスト・ケインジアン体系の再考察の過程において、シュムペーター体系がポスト・ケインジアン体系と結びつけられていった。そしてその論文が1冊の本（「現代経済変動理論」新評論 昭和49年）として出版されたのを機として内外からいただいた批評では、「ポスト・ケインジアン体系とシュムペーター体系とを結びつける」という点についての好意的評価を受けた。このことに勇気づけられ、一時はあきらめかけていたこのテーマに、再び立ち向かうことを決心した。

このことを実行するためには、まず最初に、経済学の異端児として敬して遠ざけられてきたシュムペーター体系そのものを理解し、さまざまな方向からこれを検討する必要があった。その主旨にそったものが本書である。

第1編では、シュムペーターの日本における位置づけとケインズ理論との相違について簡単にふれ、第2編では、シュムペーターの理論の中で重要な役割を占めている「独占」の形成過程と彼が対象とした資本主義というものについての当時支配的であった代表的な論者の理論を取上げた。ヒルファーデングとレニーンの理論がそれである。この両者の理論は資本主

義をはじめから否定的にとらえたのに対して、シュムペーターの場合には、当初からそれを否定するという型はとらず実証分析の中からまず資本主義の長所をとらえ、それがどのような型で消滅していくのかということ論じた歴史的、実証的かつ理論的分析であるという相違がある。そこで彼のこの特徴を知るために第3編では歴史的概観を行ない、それを第4編で理論的にまとめあげたうえ、さまざまな角度からの検討をもここに含めた。その結果、問題となってくるのはポスト・ケインジアンとマルクスおよびシュムペーター理論との明白な相違にもかかわらず存在するいくつかの類似点である。これをいま一度整理することによって経済変動理論への一層のアプローチを試みることを目的として第5編ではシュムペーターとポスト・ケインジアンの、そして第6編では過剰投資理論との比較検討を行ない、本書の全内容とした。

昭和50年5月から51年2月までの10カ月間を北大経済学部にて国内留学をし、大学院を終了して実に6年ぶり、長期にわたって研究生活のみに没頭することができた。この間、恩師早川泰正教授（北海道大学経済学部＝北大図書館長）は、私に研究室をお貸し下され、御自身は、北大図書館長室で御研究とその他一切のお仕事をなさるといふ、身にあまる御好意をいただいた。それにもかかわらず、私の力不足からそのときまとめた論文である本書は、御恩にむくいるだけの内容とすることができなかった。

開校もない北海学園大学に学んだ私に、新設校の業務多忙にもかかわらず、名生望教授（北海学園大学＝大妻女子大学）をはじめ、北海道大学から非常勤でいらして下さっていた大爺栄一教授（北海道大学経済学部長）と長谷部亮一教授（北海道大学＝小樽商科大学）から、大学院進学のための御指導をいただくことができなかったならば、私は研究者への途を歩むことはできなかったかも知れない。

また、当時兄のように若かった師、柴田義人教授（北海道学國大学経済学部長）による、ことあるごとの御叱咤に無念の思いをこらえたことも、この上もない良薬となったいまは懐かしい思い出である。ささやかな研究が進むにつれ、師達は、いかにすぐれているかを知るのみである。無力な私は、一層の努力をしなければならない。

なお、本書の出版に御尽力下さった泉文堂の竹内稻生氏に心から感謝申し上げます次第である。

昭和51年3月9日、父の命日

旭川にて

亀 畑 義 彦

目 次

はじめに

第1編 シュムペーターとケインズ	1
------------------	---

第1章 シュムペーター教授について	3
-------------------	---

第2章 シュムペーターとケインズ	10
------------------	----

第3章 ケインズと景気循環	14
---------------	----

第2編 「独占」の形成過程とシュムペーターの 時代の資本主義観	19
------------------------------------	----

第1章 独占の形成にいたる三つの例	21
-------------------	----

§1 イギリス	21
---------	----

§2 ドイツ	25
--------	----

§3 アメリカ	28
---------	----

第2章 ヒルファードイングの資本主義論	32
---------------------	----

§1 恐慌の一般理論	32
------------	----

§2 恐慌の諸原因	36
-----------	----

§3 資本の回転期間の短縮	37
---------------	----

§4 流通期間の短縮	37
------------	----

§5 自然資源の価格騰貴	38
--------------	----

§6 景気の経過における信用関係	40
------------------	----

§7 沈滞期における貨幣資本と生産資本	42
---------------------	----

§8 恐慌の性格における変化（カルテル）と恐慌	43
-------------------------	----

第3章 レーニンの資本主義論	47
----------------	----

目次

§ 1	序	47
§ 2	帝国主義論	48
第3編 シュムペーターによる歴史的概観		65
第1章 歴史的概観に進むために		67
§ 1	シュムペーターの問題意識	67
§ 2	景気循環分析のために通常研究される時期に 先だつ300年の状態と過程（15世紀から1780年まで）	70
第2章 産業革命の時期（1787～1842年までのコンドラ ティーフ長期波動）		75
第3章 第2コンドラティーフ長期波動から第3コン ドラティーフ長期波動まで		85
§ 1	第2コンドラティーフ長期波動（1843年から1897年 までの期間＝鉄道化）	85
i	総説	
ii	農業状況	
iii	鉄道化	
iv	ドイツ、イギリ スおよびアメリカにおける製造業の若干の特徴	
§ 2	第3コンドラティーフの16年間（電気、自動車および化学）	93
第4章 第1次大戦後（1919年）から1929年までの概観		96
第5章 世界恐慌とその後（1930年から1938年まで）		117
§ 1	1930年	117
i	アメリカ	
ii	イギリス	
iii	ドイツ	
§ 2	1931年および1932年	118
i	ドイツ	
ii	アメリカ	
iii	イギリス	
§ 3	1931年から1938年までのイギリス	121
§ 4	ドイツの国家指導経済（1933年から1938年）	123
§ 5	アメリカの回復と回復政策（1933年から1935年まで）	124

第4編	シュムペーターの理論的側面	127
第1章	シュムペーターの景気循環理論	129
§ 1	均衡の概念について	129
§ 2	経済体系はどのようにして発展を生み出すか	135
§ 3	景気循環モデル（3つの接近）	140
	i 骨格の観察（第1次および第2次接近） ii 第3次接近	
第2章	シュムペーター・モデルの検討	147
§ 1	理論の要点を中心として	147
§ 2	シュムペーターとマルクス	149
§ 3	シュムペーターに停滞理論はあるか	152
§ 4	シュムペーターと独占	156
第5編	シュムペーターとポスト・ケインジアン との比較検討	163
第1章	ハロッド＝ドーマー型成長理論と シュムペーター理論との比較検討	165
第2章	ヒックスの景気循環理論とシュムペーター 理論との比較検討	170
第6編	シュムペーターと過剰投資理論	179
第1章	ツガンの景気理論	181
§ 1	景気理論	181
§ 2	ツガンの景気理論の検討	184
第2章	シュピートホフの景気循環理論	187

目次

§ 1 景気循環理論	187
§ 2 信用創造についての考えかた	191
第3章 景気転換を内在させるものとしての加速 度機構——早川＝富塚論争——	198
§ 1 早川理論	198
§ 2 富塚教授による批判	200
§ 3 早川教授による回答	201
結びにかえて	203
シュムペーターの主たる文献	205
シュムペーターについての研究論文ならびに解説書	205

第1編 シュムペーターとケインズ

第1章 シュムペーター教授について^①

Joseph Alois Schumpeter は、1883年2月3日にオーストリアのモラビエ (Moravio) に生まれた。同じ年にケインズが生まれ、カール・マルクスがその偉大な生涯を終えている。

チェコスロバキア領モラビエのトリーシュの織物製造業主であったシュムペーターの父は、彼を生んだ4年後に若くして世を去り、医者の娘であった母親の手によって育てられるが、その過程で居住地はモラビエからガッツヘ、そしてウィーンへと移っている。

1901年にウィーン大学に入学したシュムペーターは、そこで法律学と経済学とを専攻し、1906年には早くも学位を取得している。ウィーン大学で彼は、ウィザーとベーム・バベルクとの指導を受け、この偉大な2人の経済学者から大きな影響を受けることになる。このことは、シュムペーターの「循環的流れ」についての考え方がワルラスの理論にウィザーとベームの帰属理論を取入れ、そして経済発展の過程については、ベームの迂回生産の理論 (Roundabout Method of Production) を基礎としていることにも現われている。またベームのセミナーには、当時、オットー・パウエル、ルドルフ・ヒルファーディングが学生として参加していた。シュムペーターの「景気循環理論」とヒルファーディングの「金融資本論」とは、その帰結においては異なるが、理論内容において類似を示す点も多いことは、この関係によるものであろう。

シュムペーターの師ウィザーとベームの学問に影響を与えたのは、同じウィーン大学の経済学者、カール・メンガーであった。オーストリア学派はメンガーによって開かれ、ウィザーとベームとによって継承さ

第1編 シュムペーターとケインズ

れ、発展したといわれているが、両者ともメンガーから直接指導を受けたわけではなかった。メンガーがウィーン大学で講義を開始した1872年には、この両者は、ウィーン大学を卒業して官界に入っており、1880年代には、ウィーザーはプラグ大学にそしてベームはインスブルグ大学に奉職していたから、共にウィーンから遠くへだたっており、かつ両者がウィーン大学に戻ってきたときには、メンガーはすでにウィーン大学を退職していた。しかしながら経済学説史上不滅の名著『国民経済学原理』（Grundsätze der Volkslehre, 1871）に共鳴した2人は、メンガーの学説の発展に寄与することになる。しかし2人の理論的重点や分析方法は各々異なっておりかつメンガーの理論をそのまま受けついだものではなかった。

シュムペーターの処女作『理論経済学の本質と主要内容』^②（1909年）の序文において、彼は、レオン・ワルラスとウィーザーとの影響を受けたことを述べている。しかしシュムペーターへのワルラスからの影響は、シュムペーターへのベームの影響のように直接的なものではなかった。この論文はウィーン大学の就職論文となり、1909年にウィーン大学の講師となるが、その数カ月後、カゼルノビッツ大学の教授となり、さらに1912年には、ベームの推薦によってグラーツ大学の教授になった。そしてこの年に『経済発展の理論』^③が公刊される。この書もまたワルラスの一般均衡理論の中にオーストリア学派のウィーザーおよびベームの考え方を取入れたものであるという意味において処女作の姉妹編といってもよい。この書が発刊された翌年の1913年に、シュムペーターはコロンビア大学の交換教授となるが、その期間の終了する1914年には『学説および方法論史の諸現論』^④（日本では経済学説史という書名で翻訳されている）が公刊される。そして1918年のオーストリア革命後に成立したオットー・パウエル内閣の大蔵大臣に就任したのを機に、一時大学を離れることになる。この内閣は、戦後の混乱の中であって短期のうちに解散したため、大蔵大臣としてのシュ

第1章 シュムペーター教授について

ムペーターの才覚については知るよしもない。その後ウィーンの **Biederman Bank** の総裁となるが、当時の安定恐慌の時代では手腕を発揮するすべもないままにこの職をしりぞくことになる。政治生活と実業界との両方の仕事に失敗した失意のさなかに、東京大学が彼を客員教授として招きたい意向を、ベルリン大学で生活をしていた河合一郎氏によってシュムペーターに伝えられる。研究生活にもどることを希望していたシュムペーターは、この申し出をことのほか喜び、早速、東大との契約が結ばれる。しかしこの直後、ドイツのボン大学で、**ディーツェル** (1857~1935) 退官の後任としての奉職をプロシヤ文部大臣から要請されたことによって、東大への奉職は実現されなかった。このようにして1926年に再び研究生生活に復帰し、以後2度と政界および実業界に出馬することはなかった。そして1931年にハーバード大学の教授となりアメリカに帰化する。この赴任の途中に、彼は日本に立寄っており、そのとき、東京大学で **Business Cycle**、神戸大学で「経済学の現状」と題する講演を行なっている。この年は、1930年1月の金解禁のデフレ・ショックが日本にも影響を与えている時期で、失業者が街にあふれていた。このようなときにシュムペーターの **Business Cycle** という題名の講演は、興味あふれるものであったことであろう。この講演の中で、シュムペーターは、景気循環を研究するためには、統計資料の収集と分析が必要であること、ある程度は歴史家でもなければならぬこと、景気循環には、コンドラティーフ、ジュグラールおよびキチン循環が存在することおよび革新と信用創造について言及している。このシュムペーターの講演は、資本主義の長期的視点に立ったものであった。しかし1930年代の経済の現実には、日ましにふくれ上る失業という疾病に悩みきっているときであった。いまずぐ必要なのは、予防医学よりも特效薬であったのである。この特效薬についての研究は、イギリスにおいてケインズが、カーンの理論を基にして着々と進められていた。加えてシュムペ

第1編 シュムペーターとケインズ

ーターの長期理論も、当時は、ヴァルガの「世界恐慌史」が長期理論の代表的なものとして扱われていた。このような事情から、この偉大な経済学者の経済理論が、その後の景気循環の研究者達からは、敬して遠ざけられる結果になってしまった。敬して遠ざけられたということは、無視されたということではない。むしろシュムペーターの影響は、表面には出なかったとはいえ、日本の経済学者達に根強くかつ、広範囲な影響を与えたということができよう。例えば、シュムペーターが東京大学で講演を行なったとき、木村健康、安井琢磨先生も聴衆の1人であった。当時、東大の学生（3年）であったこの若き研究者達にとって、本場の経済学の話は、深い感銘をあたえたことであろう。この講演後、安井琢磨先生は、シュムペーターに、経済学を研究するためには何から勉強したらよいのかという質問をし、この間に対してシュムペーターは、“Begin with Walras”と答えたという。日本の近代経済学の発展の基礎を作った主要なメンバーである彼等2人のそれ以後の活躍は、シュムペーターに大きく依拠していると考えてよいであろう。また、経済変動理論の研究者達は、何らかの形でシュムペーターの理論を考慮しているといえる。

シュムペーターが来日する以前に、シュムペーターの門下にあった2人の日本人の研究者がいた。東畑精一と中山伊知郎とである。中山伊知郎は福田徳三門下の1人である。福田徳三先生は、日本の経済学を創りあげていった人々の中でも中心的な人物でありかつ、一橋大学の歴史の中で最も偉大な人物の1人でもある。福田徳三先生は、1900年（明治33年）にドイツに留学し、ミュンヘン大学で、ルヨ・ブレンターノ（新歴史学派）^⑤とケオルグ・フォン・マイヤー（統計学）に師事する。ここで彼は、ブレンターノの希望によって、大変な苦勞をして「Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan」という書物を発刊する。1975年現在においてすら、日本の経済学は輸入経済学の傾向が強い。まし

てこれは明治の時代である。それだけにこの日本の経済史に関する書物の反響は大きく、「シュモラー年報」にはラートゲンの書評がのったのをはじめ、いくつかの論評がなされた。そして帰国後、一橋大学で、門下生達に、クールノー、ゴッセンおよびワルラスの研究を指導する。この指導方針は、以後シュムペーターの知るところとなり、深く感銘したと伝えられている。まさに理論経済学におけるワルラスの重要性を、日本で最初にさぐり出したのは福田徳三先生であった。そして中山伊知郎、大熊信行、大塚金之助、宮田喜代蔵、赤松要、井藤半弥、杉本栄一、山田雄三および高島善哉等という壮勇が福田徳三先生のもとから巣立っていくのである。そしてまたこの壮勇達の門下生が、さらに幅広くかつ、精密な理論を身につけ、戦後日本のいたるところで活躍することになる。

またシュムペーターの魅力にとりつかれた中山伊知郎と東畑精一とは、帰国後、「経済発展の理論」^⑥、「経済学史」^⑦、「資本主義、社会主義、民主主義」^⑧、「十大経済学者」^⑨、「経済分析の歴史」を、そして「理論経済学の本質と主要内容」は、木村健康、安井琢磨の手によって翻訳される。

話が前後するが、シュムペーターがハーバード大学教授となってから、1939年に、「経済発展の理論」の一層の成果であり、彼の経済学の真髄ともいふべき「景気循環理論」(Business Cycles, A Theoretical Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process)^⑩を発刊する。わずか30才にして「理論経済学の主要内容」^⑪、「経済発展の理論」^⑫、「経済学史」^⑬の名著を世に送り出してから「景気循環理論」を発刊するまで、実に25年の年月を要しているのである。そしてこの書のビジョンの一層の発展として、1942年に「資本主義、社会主義、民主主義」(全3巻)が完成する。彼の「景気循環理論」が理論的、歴史的および統計的分析という意味でケインズの「一般理論」と対比されるものであるが、「資本主義、社会主義、民主主義」では、ポスト・ケインジアンが資本主義発展のための政策と考えてい